

計画演習 II

09 1. 神戸ランプラス・シティ計画

開講年次：学部4回生前期

[担当教員(前半)]

各研究室指導教員

[Teaching Assistant (修士1年)]

横山泰 (A61) 竹内一貴 (A61)

■六甲山系と大阪湾に挟まれた東西 30km に渡る神戸市の市街地は、山から海へと向かう南北約 2.5 ~ 4km 傾斜地上の上に発達してきた。多くの河川や道路などが無数の小さな南北軸を形成している。今回の演習では、神戸市の市街地の構造を理解し、スペイン・バルセロナの市街地に発達しているような海へ向かう軸線=RAMBLA の東として、生活都市・神戸を考えなおす試みを行う。前半課題はグループによるリサーチとマスター・プランの計画を行う。

■前半課題の進め方

・3人程度のグループで行う（ゼミ単位が基本形）。

・指導は各ゼミにおいてエスキスを行う。

・中間の進捗チェックと講評会を行う（栗山・山口が担当）。後記のスケジュール参照。

■課題内容

・神戸市市街地の南北軸を構成する道路を含む幅 100m 程度の区域を選定し、そのエリアを再活性化する計画を策定し、その計画を先導するハードウェア（建築・ランドスケープ）の提案を行う。

[前半課題]

・課題の理解・・・ディスカッション・文献調査・資料収集

・フィールドワーク・・・採集（スケッチ・撮影・インタビュー）

・分析・・・現況図作成・土地利用・ストリート・ファサード等

・マスター・プラン・・・将来像の提示、デザイン・ガイドラインの策定

みどりのさんぽみち

三輪・栗山研究室 荒木爽祐、小西健友、富田泉、原川圭士、村上由佳 松下・藤田研究室 木下裕貴

緑のプロムナードとして道全体のハード面を改修する。道と選んだ各区域において歩道と建物敷地の間の境界部分を道全体を通したランドスケープとして作り上げていく。

訪れた人が思わず歩きたいと思ってくれるような道作りを目指していく。



09

2. アーバン・デザイン設計課題

開講年次：学部4回生前期

[担当教員(後半)]

アーバン・デザイン設計課題

長澤伸貴（神戸芸術工科大学准教授）福岡孝則（特命准教授）

アーバン・デザイン計画課題

北後明彦（教授）大西一嘉（准教授）近藤民代（准教授）

[Teaching Assistant (修士1年)]

横山泰 (A61) 竹内一貴 (A61)

■到達目標

1. 中規模な敷地における都市のコンテキストを読み解き、適切な動線計画と空間配置ができること
2. 対象敷地と前半課題で取り組んだ軸及び都市スケールの戦略との関係を意識しつつ設計を進めること（細部 ⇄ 全体）

3. 敷地内の建築・ランドスケープ空間の中で減築による新しい空間の挿入、既存建築・ランドスケープ空間のコンバージョン・リノベーションの手法を学び、神戸の都市戦略に対応した設計を行えること
4. 都市内の回遊性を高めるための建築・ランドスケープのレベル操作、ボリューム・ボンドの戦略的な配置及び構成ができること
5. ランドスケープ空間（ソフト・ハード）の操作、屋外空間のアクティビティ・プログラムに対応した多機能型の空間の操作、利用形態や身体性を意識したスケール・構造物・素材の設定ができること

■課題設定の背景

六甲山系と大阪湾に挟まれた傾斜地上に発達した神戸市は東西南方向への強い軸と河川や道路など無数の小さな南北軸によって形成されている。神戸市は山と海の迫る立地の特性を生かして別荘・リゾート・港湾を開拓した海運や貿易、鉄鋼・造船・機械などの各種工業そして近年はファッションや医療産業の集積地として現在まで発展してきた。しかししながら今後の人口減、減築、空き家の増加、産業の転換といった社会状況の変化を見越して新しい都市像を描き出すことが必要となる。本課題では神戸の持つ自然条件、景観条件、人、モノ、社会、文化、歴史条件などをふまえて未来の都市像を描き出すことを目指すものである。

■課題主旨

一つの都市は、一曲の交響楽や一編の詩になぞらえることができるということは、單なる比喩ではない。これらのものは本質を同じにしているのだから。さらに、恐らくはもとより重なることに、都市といふものは、自然と人工の合流点に位置しているのである。生物としての歴史を都市の境界の中に包み込み、同時に、思考する存在としてのあらゆる意図で都市を形成している動物たちの教団組織である都市は、その生成においても形態においても、生物学的繁殖と有機体としての進化と美的創造とに、等しく関わりをもつてゐるのである。都市は、自然としては客体であり、同時に文化としての主体である。個であり、集団である。生きられたるものであり、夢想されたものである。いわば、優れて人間的なものなのである。

クロード・レヴィ・ストロース「悲しき熱帯」（上）（川田順造訳、中央公論社、1977）

Kitanno Promenade

加藤実悠

街の中にありながらも社会性を失った空地と生活者の動線である道を神戸ブランドを発信を目的とする北野工房によって縫うようにつなぎ合せることで、過疎化が進む北野の街に神戸の“生活文化”をまとった新たな観光軸を計画する。



都市の余白

橋本阿季

昔の独特な文化が失われ難多な一都市に成り下がってしまった神戸アロード。

そこにある余白空間に注目し、新たな人の居場所としての建築のあり方を提案する。

この道の魅力を再発見しサードプレイスとして再編成することで、今まで見えなかった神戸の魅力が溢れ出す。



Euphonia -あるいは層累する知の殿堂-

河本淳史

高齢者のための生涯学習センターと児童館を併設した施設を提案する。

地域の『知の床』であるお年寄りの知恵を子供たちは享受し、また、お年寄りは活発に遊び、そして学ぶ子供たちの活動を目にし、自らの生活をより充実多いものにしていく。

